平成２５年度「重点研究費」研究成果報告書

研究課題	日本語学習者のノートテイキングの実態と効果的な指導法に関する実証的研究

研究代表者

氏名	所属	職名
許　夏玲	留学生センター	准教授

研究分担者

氏名	所属	職名

【研究成果の概要】　（文字の大きさ９ポイント・字数 800 字～1600 字程度）

これまで日本語による学部講義の談話の表現や理解に関する研究が多くなされてきた。しかし、上級レベルまでの段階をたどっている途中の中上級学習者の日本語授業のノートテイキングに関する研究は管見の限りあまりない。本研究では、中上級学習者の日本語授業でのノートテイキングを中心に考察し、ノートテイキングに見られる中上級学習者の特徴、問題点及び教師側の授業への示唆を探ることを目的とする。

今回、2012 年度後期の日本語作文科目及び、日本語文法科目の中上級（中級後半～上級前半程度）の日本語学習者を研究対象として、パワーポイントを用いて授業を行った。研究方法として、学期開始後、学期終了前に日本語学習者の授業ノートを考察し、またアンケート調査を行い、学習者のノートテイキングに関する困難点やノートテイキングに対する意識、ノートテイキングの変化等を調査・分析した。

まず、学期開始後の調査アンケートの回答（20 名）によると、自分の日本語能力において「書く」に自信を持っている学習者は、5 名しかいなかったことがわかった。多くの学習者は、自分の日本語能力の「読む」（6 名）、「聞く」（5 名）、「話す・聞く」（3 名）に自信を持っていると回答した。また、学習者の母国大学の授業形式に関しては、プリント配布（16 名）、板書（12 名）のほうが多く、パワーポイントによる授業はその半分（7 名）となり、パワーポイント資料は、授業ではそれほど用いられていないことがわかった。そのほか、授業内容のノートテイクに関しては、時々（4 名）、あまり（4 名）、なし（1 名）という回答が得られ、約半分の回答者はノートテイクに慣れていないということが言えよう

ノートテイキングに見られる学習者の日本語力は、大きく次の 4 通りに分けられる。

【ノート内容】

1.聞き取り型
2.書き写し型
3.母語注釈型
4.日本語注釈型

今回のデータでは、大半の学習者には、書き写し型と母語注釈型が多かった。また、書く能力と聴解力のある学習者には、母語注釈型が多かった。これらの学習者は、国籍に関わらず、資料内容に関する注釈、ことばの意味や教師の豆知識を母語で書きとめることが見られた。

学期末に行われた調査アンケートの結果では、パワーポイントの資料を見ながらノートを取ることに対して良い評価が多く得られた。「書き取れない」や「書き写しが遅い」といった学習者の意見に対し、まずパワーポイントの利点を活かし、板書と同じ機能で教師の話のスピードに合わせて要点ごとに提示することを勧めたい。

また、漢字に振り仮名をつけたり、ことばや表現を選択したりするなど、内容への理解を助けるための工夫が必要である。授業のプリントを配布することになると、学習者がノートを取る意欲がなくなると考えられるため、パワーポイントで表示できないものや内容をプリントで配布することが望ましいだろう。パワーポイントの資料を作成する際、学習者に提示したい授業内容の要点は何かを考え、また学習者側のことやニーズを配慮したうえ、学習者にとってわかりやすい授業内容に心がけることが必要である。

研究成果発表方法

［発表論文名（口頭発表を含む），氏名，学会誌等名（投稿中・投稿予定・執筆中）を記入する。］

※本経費を用いて、報告書（冊子等）を作成した場合には、本様式とともに1部を提出すること。
なお、提出された報告書は教育実践研究推進本部を通じて附属図書館へ寄贈する。

「日本語教育におけるノートテイキングの意義-学習者側と教師側の観点から-」第６回日本語教育学会研究集会,2013,京都外国語大学
「日本語教育におけるノートテイキングの意義-学習者側と教師側の観点から-」東京学芸大学紀要 - 総合教育科学系 II 第６５集,2013